

コレットとベル・エポック

——『私の修業時代』——

横 川 晶 子

〔キーワード：①ベル・エポック；②年代記；③大衆〕

1. 自伝と年代記

『私の修業時代』 *Mes Apprentissages*¹⁾は、コレットが最初の夫ウィリーとの結婚生活を回想した作品である。コレットとウィリーは夫婦関係を解消したのちも、ウィリーの名で発表された「クロディーヌ・シリーズ」の作者や著作権の問題をめぐる対立を続けていた。しかも、ウィリーが1931年に没した後に、「クロディーヌ・シリーズ」の原稿にウィリーが付したコメントが発表されるなど²⁾、文壇や一般読者は二人の文学的な関係について相変わらずの興味を示していた。それゆえコレットにとって、『私の修業時代』の執筆は、かつてウィリーがどのような形で作品執筆に関わっていたかを明らかにし、「クロディーヌ・シリーズ」の作者の真偽の問題に最終的な決着をつける意味を持っていた。

実際『私の修業時代』は、ウィリーとコレットの共作がどのような形でおこなわれたかを明らかにし、また、ウィリーが多くのゴーストライターを雇い、他人の作品に自分の署名をつけて出版していた事実を明らかにするなど、当時においては暴露本的な性格を持っていた。しかし、後世の読者にとってこの作品はむしろ、地方在住の名もない娘がパリのダンディと

結婚し、都会の生活を送るようになり、夫の専制や浮気に苦しみながら、やがてひとりの女性として作家として自立することになるまでを語る、まさにコレットの自伝と称すべき作品である。

しかしJ・デュボン氏も指摘するように、この作品の語り手は、若き日のコレットがどのような思いを抱き、どのように変わっていったかという点については、意外なほど寡黙である³⁾。そして、作者の内面に関する記述を補うかのように、作品の多くページが、コレットを取り巻くさまざまな人物の描写に費やされている。コレットとウィリーの結婚生活は1893年から1906年まで続いたが⁴⁾、活発な文筆活動をおこなっていたこの時期のウィリーの身辺を記述し、また、コレット自身がパリで出会った有名無名の人物たちについて叙述することで、『私の修業時代』は、いわゆるベル・エポックのパリの年代記としての性格を強く持つことになる。

コレットが『私の修業時代』を発表した1935年前後は、著名な作家による年代記の執筆がブームとなり⁵⁾、「戦前」、つまりベル・エポック期を回顧した作品がいくつも出版された。その代表的なものがポール・モランの『1900年』1900⁶⁾、そしてジャン・コクトーの『肖像写真』*Portraits-souvenir*⁷⁾である。モランの『1900年』は、「1900年」に象徴される第一次世界大戦前のフランス社会や風俗を描いて、このジャンルの先駆けとして評判になった作品である。一方『肖像写真』は、さまざまな分野で活躍中のコクトーが、1900年から1914年にかけて出会った「風変わりな人々や場所」⁸⁾を思いつくままに、自身のイラストとともに書き綴って人気を博した作品である。コレットがモランそしてコクトーと親しくしていた事実を考慮するまでもなく、『私の修業時代』を執筆するにあたって両作品の存在が意識されたことは想像に難くない⁹⁾。また、本来自伝として書かれるべき『私の修業時代』が年代記的な性格を強く持っているのは、当時のこの

ような文壇事情が影響を与えたのだと考えることもできる。『私の修業時代』の読解を通じてコレットとベル・エポックとの関わりを考察する前に、この作品に先行して発表されたモランとコクトーの「ベル・エポック年代記」を検討することは、それゆえ、作家と時代の関係のあり方を探るうえでも有効な作業であると思われる。

2. モランとコクトー

『1900年』の序文で、モランは「1900年」という年を選んだ理由を次のように説明する。

十九世紀は1914年に終わったと言われるが、私はこの意見に賛成できない。十九世紀が終わったのは1900年である。1900年とは愛と料理と財政の古い体制なのである。[...] 1900年は頂上に設けられた休息点だ。そこからは二つの谷が見えるが、それぞれの谷は互いには見えていない¹⁰⁾。

こうしてモランは、フランスが1900年を境に「1914年」という深淵に向かって下っていったのだと主張したうえで本文に入り、まず、世紀末最大の事件、「ドレフュス事件」がフランス社会のさまざまな分野に与えた影響について記述する。次に、「万国博覧会」「自動車レースとスポーツ」「芸術」「ハイライフ」といった、1900年に大きな話題をよんだ出来事や風俗現象、それらに関わる人物などを詳細に紹介していく。しかし、華やかな話題を取り上げるモランの口調にはどこかシニカルな響きがつきまとい、最後に、作品を締めくくる次のような呼びかけで彼の真意が明らかとなる。

…とはいえ、1900 年よ、私たちはおまえに非難の言葉を述べたい。
なぜおまえは、今日の私たちが痛風になってしまうほどたっぷりと食
べて飲んだのだ。なぜおまえは、細菌と電気と白人種を私たちに信じ
込ませたのだ。[...] なぜおまえは、これほどまでに醜く豊かで幸福だ
ったのだ。

1900 年よ、私たちはおまえの皺のなかに私たちの未来を読み取る
……¹¹⁾。

このように、ベル・エポックに向けられたモランの視線は、繁栄の頂点
にあった 1900 年が衰退の始まりでもあったとする、批判的・省察的なも
のである。『1900 年』は、1940 年に新たな版で再出版されるが、1940 年版
に付した序文においてモランは、「私は 1900 年の社会のタブローを、1900
年と 1930 年が類似しているのではないかという危惧のものに描いた」¹²⁾と
語り、その歴史主義的な姿勢を改めて確認している。

対象から距離をとって、客観的に網羅的にベル・エポックを記述しよう
とするモランに対し、1935 年のコクトーは、モランのスタイルをあえて避
けるかのように、「ぼくには回想録などというものはとても書けそうにな
い。まずは年代が混乱してしまう。10 年くらい飛ばしてしまうし、人物と
背景の結びつきもとんでもない組み合わせにになってしまう」と最初に断った
うえで、1900 年から 1914 年までに会った風変わりな人物や場所の「記
念写真」を「ばらばらに」集めていくと宣言する¹³⁾。実際コクトーは、ロッ
シーニやサラサーテが出入りする祖父母の家、コクトーが『肖像写真』を
執筆中の南仏の「ウェルカム・ホテル」、オペラ座へ出かけるコクトーの母
の華やかな身支度の様子、1933 年のアンナ・ド・ノアイユの死という出来

事など、自ら設定した時間枠を越え、時間の流れを無視し、融通無碍に、気の向くままに筆を進めていく。

しかしコクトーは、意味もなく「肖像写真」を集めているわけではない。彼には、ベル・エポック期に人気を博した人物や評判となった事柄を描写することで、人目を引く非凡なものに共通する新奇さを賞賛し、前衛芸術を顕揚する彼自身の立場を明確に打ち立てるという目的があった。だからこそ、冒頭で次のように述べるのである。

1934年から1935年へ。ひとつの幕が下り、別の幕が上がる。古い生命は死んだ。生命万歳！ ぼくがその先端に立って、不承不承、全力に生きてきた時代が死んだ。そして、新しい時代が始まりつつあることをぼくのアンテナが告げている。[...] ぼくが到来を予感したこの新しい時代は、ぼくに大きな希望を与え、ぼくを興奮させている¹⁴⁾。

コクトーは、この「新しい時代」と「1900年-1914年」が重なり合うかのように、ベル・エポックの「風変わりな」肖像写真を次々に紹介するのである。彼は最後にこう締めくくる。

災厄に壊滅させられたように見えた芸術が、災厄のうえに立ちはまだかっているのを遠くから見て人は驚く。そう、実際は逆で、馬鹿な大衆がほかのことに気を取られていると、自由な空間がたくさん手に入るのだ。死んだ若者たちは、自分たちの犠牲を理由に命令を下す。老人への敬意を生き残った若者に向けろ、と。こうして芸術は、これまでにないスピードで進化する。[...] 1935年は新しい時代に向けて開かれたのだ¹⁵⁾。

つまり、コクトーにとってベル・エポックの「風変わりな」精神は、戦争によって滅びたのではなく、その新奇さは今も息づき新たに開花しようとしているのだ。

モランとコクトーは、このようにまったく異なった立場からベル・エポックを語り、そこに正と負の正反対の価値づけをおこなっている。しかし彼らに共通しているのは、ベル・エポックが、歴史の流れを変える決定的な出来事ではないにしても、ある突出した特別な事象であり、その後に生じる時代の変遷と確かな因果関係を持っているとみなす、歴史主義的な認識である。

3. 『私の修業時代』

それでは、モランやコクトーの後を継いで、コレットはどのようなベル・エポックを語ったのだろうか。『私の修業時代』の書き出しでコレットは、自分の作品に与えるべき「調子」を次のように説明している。

生彩ある、刺激的で神秘的な束の間の事柄には 20 ページを、他人がこれまで何度も繰り返し、これからも繰り返すであろう周知の敬うべき事柄には 20 行を。月並みなことを前にしては驚き、世間の人々が驚異や奇蹟や大惨事を前にしてあちこちで「ああ！」と驚きの声を上げているのを耳にしながら、自分は退屈してとうとうと眠り込む——こういったところが私のリズムだろう……¹⁶⁾。

つまりコレットは、これまで他人が何度も言及した周知の大事件や有名

な事柄について語るの少しだけにして、自分はもっぱら、些細ではあるが印象的なことについて言葉を費やそうというのである。実際、『私の修業時代』は、モランが重きを置いたドレフュス事件や万国博覧会、コクトーが好んで取り上げた華やかな人物や場所についてはほとんど触れていない。コレットが会った「無名だが味のある人物」¹⁷⁾や、著名な人物であっても彼女にだけ見せた私的な表情について淡々と語られていくばかりである。

例えば、1900年の万国博覧会で「たっぷりと真珠を身に付け、アフリカのフラニ族の女のように銅製の指輪をはめて踊る」¹⁸⁾とモランが描いた
ドゥミ・モンデーヌ
高級娼婦の「ラ・ベル・オテロ」について、コレットは、彼女が女友達とくつろいだ時を過ごし、節制などものともせず健康的な食欲で素朴な食事を楽しみ、親身に男性操縦法を伝授してくれたと語る。また、舞台化された「クロディーヌ・シリーズ」のヒロイン役を演じて一世を風靡した女優のポレールについて、コクトーが、当時の人気スポットであるスケート場〈氷の宮殿〉に現われた彼女の姿を「その名もすでに傑作の仲間入りをしている人物、ポレールが現われた！ […] 彼女は流行を支配する。女たちを惑わす。男たちを興奮させる」¹⁹⁾と書いているのに対し、コレットは、ポレールが「憑かれたような執拗さで演技を追求」し、誰よりも素晴らしくクロディーヌを演じたが、いつも辛そうな表情をして、「日が暮れたり雨が降ったと言ってはため息をつき、恋に、疑いに、舞台への野心に、間断ない渴望に悩み、また純真さゆえに、悲しげな様子をしていた」²⁰⁾と書く。

「味のある無名の人物」としては、娘を心配して探し求める母の様子を物陰から見て、愛される喜びを味わう8歳の少女や、普段は細やかな心遣いで男性を癒す善良な女性が、自分を悪女だと思い込んだ男性の前で完璧な
フアン・ファタル
「運命の女」を演じ、ついにはその男性を死に追いやった話などを取り上げている。また、自分自身の娘時代やウィリーの取り巻きだった少女たちを

回想しながら、若い娘とは、中年の男にもてあそばれたいというおぞましい情熱を抱いており、そのため、愛してもいない男たちの下心に喜んでつけこむものだと言するなど、ベル・エポックの女性たちの内に秘められた素顔を描き出す。

もちろん、ウィリーをはじめ、ポール・マソン、マルセル・シュオップ、ジャン・ロラン、カチュル・マンデスといった、当時の名だたる作家や知識人たちにも話題は及ぶが、コレットが好んで描き出すのは、彼らの華々しい活躍の場面ではなく、私的な場で彼らが見せる、疲れて孤独な、あるいは、老いや病に苛立った弱々しい姿である。

4. コレットとベル・エポック

世紀の転換点から 1914 年にかけての日々が「古き良き時代」であったという思いは、物質的にも精神的にも甚大な被害をフランスにもたらした第一次世界大戦が終結したとき、多くの人々のうちに共通して生じた感慨であったにちがいない。しかし、ベル・エポックを「戦争前の平和な時代」として漠然と想起するのではなく、歴史的な視線で改めて回顧するようになったのは、戦後の「狂乱の年月」と称された繁栄の時代が終わりを告げた 1930 年代においてである。そこには、第一次世界大戦後のヨーロッパを安定に導いたヴェルサイユ体制が揺らぎ、ファシズムの暗雲が影を落としはじめた時期のフランス社会の、来し方を振り返ろうとする無意識の願望が反映されていたのかもしれない。この時期に書かれたいくつものベル・エポック年代記がそれを証明している。

しかし、モランの『1900 年』やコクトーの『肖像写真』とは異なって、コレットの『私の修業時代』には、ベル・エポックという過去の一時代を

現在との関係において説明しようとする歴史主義的な視点は存在しない。コレットがベル・エポックのうちに見出したのは、無邪気で純真な少女が抱くしたたかな欲望、妖艶な娼婦が示す健康的な生命力、栄光に包まれた人物が隠し持つ弱々しい素顔といった、古い固定観念を取り払った等身大の人間像である。そしてこの人間像は、1920年代になっても、さらに時代が下っても有効なものであった。

もちろん、だからといって、ベル・エポックの時代的な特殊性が意味を持たないわけではない。ベル・エポックの文化の「大衆性」は、過去において大衆の名に還元されるしかなかった無名の個人と、特別な身分の「有名」人との距離を、これまでになく近づけることに寄与した。この時期、「文化」を享受する人々の層が飛躍的に拡大し、なによりも、見られ、描かれ、書かれるだけだった女性たちが表現の主体者となることが可能となったのである。公立学校で初等教育を受けただけの下層ブルジョワ階級に属するコレットが、ウィリーの庇護を失った後にも作家活動を続けることができたのは、このような時代の後押しがあったからにちがいない。とはいえ、大衆の趣味に迎合した作品だけを生み出したのであれば、コレットの作品の生命は短いものであっただろう。

ベル・エポックは、十九世紀と二十世紀のはざまにあって、一見おだやかな水面下にさまざまな変化をはらんだ多層的な交代の時代である。その機を捕え、人間についての感受性の領域を一気に拡大させたのがコレットの作品であるとは言えないだろうか。ベル・エポックに育まれたといっても過言ではないコレットの作品が、今日においても古さを感じさせない現代的な側面を持っているのは、ベル・エポックが一般に言われる「郷愁を誘う古き時代」であるだけではなく、新たな可能性を秘めた「始まり」の時代でもあったからである。

註

- 1) 1935 年 10 月 16 日から 12 月 18 日にかけて、週刊誌 *Marianne* に 10 回にわたって連載され、1936 年 1 月に単行本として出版された。
- 2) François CARADEC, *Feu Willy*, Carrère/J. J. Pauvert, 1984, p. 311.
- 3) Jacques DUPONT, 《Notice》 dans COLETTE, *Mes apprentissages*, in *Œuvres*, t. III, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1991, p. 1698.
- 4) 1906 年から別居をはじめ、1910 年に離婚が成立する。
- 5) Jean COCTEAU, *Portraits-souvenir*, in *Romans, Poésies, Œuvres diverses*, Le Livre de poche, 《La Pochothèque》, 1995, p. 724.
- 6) 出版は 1931 年。
- 7) 1935 年 1 月 19 日から 5 月 11 日にかけて毎週土曜日に *Figaro* 紙に連載された。
- 8) Jean COCTEAU, *op. cit.*, p. 731
- 9) コレット自身が 1932 年 12 月の書簡のなかで、モランの『1900 年』について言及している。COLETTE, *Lettres à ses pairs*, Flammarion, 1973, p. 318.
- 10) Paul MORAND, 1900, in *Œuvres*, Flammarion, 1981, p. 327.
- 11) *Ibid.*, p. 411.
- 12) *Ibid.*, p. 325.
- 13) Jean COCTEAU, *op.cit.*, pp. 729-730.
- 14) *Ibid.*, p. 731-732.
- 15) *Ibid.*, p. 853.
- 16) COLETTE, *Mes apprentissages*, in *Œuvres*, t. III, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1991, p. 987.
- 17) *Ibid.*, p. 983.
- 18) Paul MORAND, *op. cit.*, p. 361.
- 19) Jean COCTEAU, *op.cit.*, pp. 773.
- 20) COLETTE, *op. cit.*, p. 1045.

Colette et la Belle Epoque
—— *Mes Apprentissages* ——
(résumé)

YOKOKAWA Akiko

Mes Apprentissages de Colette est une œuvre autobiographique dans le sens où l'auteur y raconte sa vie conjugale et littéraire avec son premier mari Willy. Pourtant cet ouvrage écrit en 1935 peut être considéré comme une chronique de Paris au temps de la Belle Epoque parce qu'il rassemble des faits et des noms historiques de l'époque qui précède la guerre 1914-18.

C'est dans les années 1930 que les gens définissent la notion de 《Belle Epoque》, et il était d'usage pendant cette période que les journaux publient des chroniques d'écrivains célèbres, parmi lesquelles *1900*, de Paul Morand, et *Portraits-souvenir*, de Jean Cocteau, ont pris place dans l'histoire littéraire.

Nous remarquons ici que le texte de Colette ne dépeint pas ce temps comme un passé historique——c'est le style commun de Morand et de Cocteau——mais qu'il décrit les gens de l'époque tout en les dépouillant de leur ancienne image de grand homme, de demi-mondaine, de jeune fille pure et innocente, etc. Il est possible de dire que Colette a trouvé une certaine valeur universelle dans l'esprit de la Belle Epoque : d'où sa modernité qui permet de recevoir son œuvre même aujourd'hui.

(学習院大学人文科学研究科フランス文学専攻博士後期課程)